

# 長谷川テルを支えたエスペランティスト群像

山本恒人

## 1. 魯迅とエロシェンコ

「寂寞呀 寂寞呀 在沙漠上似的 寂寞呀」  
「寂しい、寂しい、まるで砂漠にいるように寂しい」

深刻に聞こえるが、これはウクライナ出身の盲目の詩人・エロシェンコが魯迅の前で呟いた言葉で、北京には蛙の鳴き声がない、と嘆いたのである。魯迅は「そんなことはない、結構鳴いているじゃあないか」と思うのだが、諸国を漂泊し、南国ビルマでは田圃、池、河、森から湧きあがる蛙の大合唱を聴き慣れていたのだから、砂漠の端に乗っかっているような北京ではそうなのかもしれないと、いささか同情する。魯迅が教育部時代に一家で住んだ広大な四合院「苦雨齋」に居候していた(1922-23)エロシェンコと一家とのほほえましい交遊は、魯迅『呐喊』に収められた「あひるの喜劇」に詳しい<sup>1</sup>。魯迅はまたエロシェンコの童話集『愛羅先珂童話集』(エロシェンコ童話集)をエスペラント語から翻訳して出版している<sup>2</sup>。

エロシェンコが「寂しい」とエスペラント語で呟いたのか、中国語で呟いたのか、までは魯迅は触れていないが、日本では小泉八雲をはるかに凌ぐ日本語通だったと伝えられる語学の天才であったから、中国語だったにちがいない。

写真A. エロシェンコと魯迅



V.エロシェンコ（1890-1950）の初来日は1914年。1919年上海経由で再来日した。このときエロシェンコを庇護したのが新宿中村屋の女主人相馬黒光である。黒光女史はエロシェンコと合奏したり、朗読会を開催したり、彼のロシア料理のレシピを中村屋に加えている。中村屋には秋田雨雀・内村鑑三・江口渙・神近市子・大杉栄・木下尚江・荻原守衛・柳敬介・竹久夢二・中村彝・鶴田吾郎・中原悌二郎など錚々たる顔ぶれが出入りし、大正期のリベラル空間が形成されており、エロシェンコはその寵児でもあった<sup>3</sup>。

写真B・C 新宿中村屋でのエロシェンコ



（座敷机の前の女性は神近市子と黒光）

写真D. 雨雀、夢二と

前列左端・竹久夢二  
中列左端・秋田雨雀



中村<sup>つね</sup>彝が描いたエロシェンコ像はあまりにも有名な作品である。教科書で出会ったとき深い衝撃を受けた。興味深いことに、このとき鶴田吾郎も、中村彝のアトリエでエロシェンコ像を左右から競作していたのである。中村の作品は国立西洋近代美術館に、鶴田の作品は新宿中村屋のサロンに別々に収蔵されて

おり、同時に鑑賞することはできない。たまたま、2009年に西洋近代美術館で両作品を並べて展示する企画展が開催されたことがあったが、何をおいてもと駆けつけた。



写真E. エロシェンコ像・左中村彝、右鶴田吾郎  
(絵の大きさの対比比率は実際そのまま)

エロシェンコは1921年のメーデーに参加し、検挙される。そして不当にも「危険分子」として日本政府によって国外追放された。その彼を迎え入れたのが冒頭に記した魯迅一家なのであった。



## 2. 中国のエスプラント運動

写真F. 大杉栄

さて新宿中村屋をめぐる人物群にはエスペランチストが珍しくない。大杉栄もそうであり、恋愛の末、大杉栄に刃傷沙汰におよんだ神近市子は国外追放されたエロシェンコの童話集を翻訳して出版した。大杉栄は1923年に甘粕憲兵大尉によって扼殺されたが、日本のエスペラント運動の草分けの一人であった。

丘浅次郎、堺利彦、大杉栄、黒坂勝美、高楠順次郎らによって、1906年日本エスペラント協会が結成された。協会草創期に大杉は講習会を開き、中国人留学生40名にもエスペラント語を教える。そこに学んだ張継、劉師培、銭玄同らが、1909年上海エスペラント学社を結成、機関誌『世界報』を発行、中国におけるエスペラント運動が始まる。中国におけるエスペラント運動の「源流は日本の大杉栄にあった」<sup>4</sup>。

中国におけるエスペラント運動の今日の状況がまとめられている。世界の

中国におけるエスペラント運動の現状		
メディア	出版物	刊行物400種
	定期雑誌	中国報道
	国際放送局	1時間番組1日4回
	ネット	中華網
教育	大学講座	40大学以上
	学習人口	40万人
	年齢層	1950年代以降
	主力活動者	1万人
魯安琪「中国のエスペラント活動」、『人民画報』2004.9.		

エスペラント運動の中でどのようなレベルにあるかは不明だが、「大学における講座数」（社会人教育を含むと思われる）や中国を紹介するエスペラント語放送が毎日行われているというのは、なかなかのレベルだと思われる。因みに、国際放送局の受信周波数を掲げておく。

中国国際放送局・エスペラント語 短波放送（毎日）				
時間(UTC)	日本時間	周波数	波長	方向
11:00-12:00	20:00-21:00	11635kHz, 15110kHz	19,85m, 25,78m	日本、韓国
13:00-14:00	22:00-23:00	11650kHz, 9440kHz	25,75m, 31,78m	東南アジア
19:30-20:30	04:30-05:30	9745kHz, 7265kHz	30,79m, 41,29m	ヨーロッパ
22:00-23:00	07:00-08:00	9860kHz, 7315kHz	30,43m, 41,01m	ラテンアメリカ
出所: 日本エスペラント協会「エスペラントとは?」、 <a href="http://www.bongo.ne.jp/~teg/radio/index.html">http://www.bongo.ne.jp/~teg/radio/index.html</a>				

このような状況ゆえ、日本でエスペラントに出会うことのなかった青年が中国でエスペラントの世界に触れるということも起こりうる。次の写真は、元北京外大留学生石井永人さん（現在は33歳）で、『人民中国』インターネット版に「中国で出会ったエスペラント」が掲載された。ザメンホフの胸像を共に抱く写真左の青年は「中華全国世界語（エスペラント）協会」青年委員会蔣利民さん。また、「中華全国世界語協会」と「中国報道（エスペラント語雑誌）雑誌社」は、長谷川テル（緑川英子）生誕 100 周年（2012）には記念座談会を開催している。

写真G.中国で出会ったエスペラント



写真H. 長谷川テル生誕 100 周年



### 3. 長谷川テルと中国のエスペランチスト

改革・開放が始まった 1981 年、文化大革命による迫害と鬱屈した日々から解放されたエスペランチスト古老たちが談笑しながら散策する貴重な写真がある。写真説明には「元老」とあったが、エスペランチストは「元老」などという呼称はあまり喜ばないだろう。この写真の人物の内、4 人までが長谷川テル女史と直接の交流があったエスペランチストである<sup>5</sup>。

先ず写真右 1 の張企程氏（1913—）。1937 年 4 月、上海に到着、夫劉仁と合流したばかりの長谷川テルを、葉籟士とともに訪問、邂逅を遂げる。張も葉もまだ 20 代半ばの若者であった。その模様は、長谷川テル「戦う中国で」に詳しい。葉籟士（1911～1994。建国後、中華全国世界語協会理事長、文字改革委員会秘



写真  
右1・張企程  
右3・胡愈之  
右4・陳原  
左2・葉君健  
の各氏

写真1.談笑する中国のエスペランチスト古老（1981）

書長、人民出版社副社長を歴任。1938年、中国共産党員）はその後、テル夫妻と武漢（漢口）、重慶へと行動を共にし、助言、援助を行う。上海陥落後の脱出時にはテル夫妻の資金は底をついており、葉籟士が調達した。張企程は重慶で『新華日報』編集の傍ら、毎日のようにテル夫妻宅を訪問し、交流を深めている。建国後、中華全国世界語協会秘書長、エスペラント語版『人民中国』編集長、国際新聞局編撰処副処長を歴任。1950年、中国共産党員。

写真右2の胡愈之氏（1896-1986年）。1920年、胡愈之、王魯彦、巴金によって上海世界語学会が結成される。エロシェンコが北京の魯迅邸に入る前に、上海で世話をしたのが胡愈之。1937年1月、第一次上海事変の際、日本軍により上海世界語学会の建物が焼き払われて以来、「エスペラントを使って中国の解放のために」というスローガンを掲げ、新たに上海世界語協会を設立、機関誌『ラ・モンド』発行。1938年6月末、上海を立って7カ月目にテル夫妻は武漢に到着、国共合作下の国民党中央宣伝部国際宣伝処対日科に所属することになる。郭沫若の軍事委員会政治部第三庁には胡愈之、葉籟士、葉君健が所属しており、彼らエスペランチストの奔走によって香港からたどり着いたのであった。中華人民共和国建国のための「建国共同綱領」を発表した中華人民政治協商会議に参画。建国後は出版総署初代署長、『光明日報』編集長、中華全国世界語協会会長。全人代常務委員会副委員長、政治協商会議副主席を歴任。1922年、中国共産党員。

写真右3の陳原氏（1918-2004）。1937年10月中国軍が上海撤退、11月テル夫妻は上海脱出を決意、香港・広州経由で武漢をめざす夫妻を葉籟士が見送った。

高い船賃を費やして広州に到着した夫妻の窮地を救ったのも中山大学の学生陳原らエスパーンチストであった。日本から帰国、故郷の広州に戻った丁克はテル夫妻・陳原と共に「広東国際協会」を立ち上げる。1938年2月、中国官憲の手で丁克とテルは投獄、テルは国外追放となる。テル夫妻は6月まで香港の貧民窟で過ごす。建国後、商務印書館総編集兼総経理、中国社会科学院語言文字応用研究所所長を歴任。1973年、中華世界語者協会秘書長を務めた陳原は、葉籟士と共に日本エスパーント大会に出席。1953年、中国共産党員。

写真左2は葉君健氏（1914～1999）。エスパーント作家。日本滞在中の1937年、中国人留学生にエスパーント語を教えていた中垣虎児郎、留学生丁克らと共に治安維持法違反で検束。釈放後、同年8月帰国、武漢で抗日運動に参加。後に郭沫若麾下の政治部第三庁に所属し、テル夫妻とは武漢で共に活躍した。建国後、輔仁大学教授、中国作家協会書記処書記を歴任。民主党派「中国民主同盟」中央委員。

#### 4. 長谷川テル反戦放送の開始



資料:同編集委員会『長谷川テル』せせらぎ書房、2007年の口絵地図に加筆。

図は長谷川テルの中国における全行程のうち、日本軍の侵略拡大につれて上海→武漢→重慶と移動した行程が示されている。それにしても大変な苦難行である。上海から武漢へは長江を汽船で遡れば、大阪から東京位の距離であるが、

上海から南京、武漢へと侵攻する日本軍の作戦経路であり危険極まりない。因みに空路で大阪から重慶へは、現在、大阪→上海 2 時間 30 分、上海→重慶は 3 時間である。

劉仁・テル夫妻は 1937 年 11 月に上海を立ち、1938 年 6 月末武漢に到着した。7 月 2 日、日中関係史に燦然と輝く長谷川テル・「日本将兵に向けた反戦放送」は、こうして開始されたのである。

しかし、1938 年 10 月には武漢も危うくなり、陥落直前、武漢を脱出、長沙、衡陽、桂林を経て、12 月に移転首都の重慶に入った。郭沫若の「対敵文化工作委員会」、後に東北出身の夫劉仁と共に「東北民衆抗日救亡総会」で活動する。国民党はテルの長男劉星を誘拐するなど国共合作を損ねるような不穏な動きを強めていた。だがテルは、重慶のエスペランティストや毎日のように訪れる張企程らとの豊かな交流に支えられ、執筆と対日反戦放送に携わった。重慶滞在は抗日戦争勝利後の 1945 年 9 月まで続いた。

テルを尊敬してやまない高杉一郎は語る。「テルの行動は、エスペラントを媒介にして日中の間に橋を架けようと努力を重ねてきた人々」、「そのような歴史を背景にして初めて考えられるもの」であり、「それを歴史から切りはなされた一人の人間の英雄的な行動としてだけとらえるのは誤りだ」<sup>6</sup>。

#### 献辞

平和と立憲主義の危機の時代に、第 64 回関西エスペラント大会の公開プログラムとして、長谷川テル女史の事績に学ぶ「朗読劇」上演を進められたエスペランティストのみなさまに心からの敬意を捧げる。

この公開プログラムを支えようと広く鑑賞を呼びかけていただいた

新日本婦人の会泉北ニュータウン支部

治安維持法国家賠償同盟堺支部

堺退職教職員の会

日中友好堺・美木多連絡会

日中友好協会堺支部

そして、ご来場いただいたみなさまに心からの感謝を捧げる。

#### 【注】

1. 中国語は、魯迅「鴨的喜劇」『呐喊』人民文学出版社、1979 年。魯迅「あひるの喜劇」『呐喊』（竹内好訳『魯迅文集 1』ちくま文庫、1991 年）。
2. 藤井省三「エロシエンコと魯迅」（第 102 回日本エスペラント大会・2015 年におけ



る講演ビデオ記録。 <https://youtu.be/jQ1ANlwKYDg> )。貴重な講演録である。

3. 新宿中村屋のHPでは、「創業者ゆかりの人々」の頁が設けられており多彩な人士が紹介されている。 <https://www.nakamuraya.co.jp/pavilion/founder/> (以下、「新宿中村屋HP」とのみ記載)。なお、相馬黒光女史を主人公として、大正期リベラル空間を壮大なスケールで描いた作品に臼井吉見『安曇野』ちくま文庫(1~5)、1987年がある。もちろん、エロシエンコも登場する。

4. 高杉一郎『中国の緑の星』(朝日選書169)朝日新聞社、1980年、p.57。

5. 以下、写真の4人および同写真には不在の葉籟土に関する記述は、高杉一郎、同前、に負う。また中国のサイト『百度』では5人すべてに関する履歴紹介があり、補完した。長谷川テルと張企程・葉籟土との邂逅場面の描写は、長谷川テル「第1部闘う中国で」宮本正男編『長谷川テル作品集』亜紀書房、1979年pp.32-35。

6. 高杉一郎、同前、p.78。

#### 【写真資料】

A. 藤井省三「エロシエンコと魯迅」(第102回日本エスペラント大会・2015年における講演ビデオ記録の画像)から、切り取って掲載させていただいた。

B. 新宿中村屋HP「ワシリー・エロシエンコ」の項掲載の写真。

C. 新宿中村屋HP「秋田雨雀」の項掲載の写真。

D. 落合道人ブログ「絵のモデルはアルバイト感覚」掲載の写真。  
<http://chinchiko.blog.so-net.ne.jp/2007-03-22>

E. 落合道人ブログ「中村彝アトリエとエロシエンコ」掲載の写真。  
<http://chinchiko.blog.so-net.ne.jp/2006-03-17>

F. 「Yahoo Image Search」大杉栄の画像から。  
<http://image.search.yahoo.co.jp/search?p=%E5%A4%A7%E6%9D%89%E6%A0%84&rkf=2&ei=UTF-8&save=0>

G. 「中国で出会ったエスペラント」『人民中国インターネット版』2010年11月。  
[http://www.peoplechina.com.cn/home/second/2010-11/23/content\\_313977.htm](http://www.peoplechina.com.cn/home/second/2010-11/23/content_313977.htm)

H. 「中華全国世界語協会」に関する記事、『中国網』2012年11月29日、  
[http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2012-11/29/content\\_27263339.htm](http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2012-11/29/content_27263339.htm)。

I. 魯安琪(文)「中国のエスペラント運動」『人民画報』2004年9月、掲載の写真  
<http://www.rmhb.com.cn/chpic/htdocs/rmhb/japan/200409/5-2.htm>

\*2016年6月19日、第64回関西エスペラント大会が公開プログラムとして「戦時下反戦放送長谷川テルと娘暁子」を再演されるにあたり、日中友好協会大阪府連合会を代表して行った「感謝のご挨拶」に加筆・整理したものである。